RYUKOKU UNIVERSITY

You, Unlimited

Ryukoku

広報誌「龍谷」

文学部 山田 優菜 さん

キーウ大学 交換留学生
ロクソラーナ・オレクシューク さん

2022 VOLUME 94

Brand Story

世界は驚くべきスピードでその姿を変え、
将来の予測が難しい時代となっています。
いま必要なことは、「学び」を深めること。
「つながり」に目覚めること。
龍谷大学は「まごころある市民」を育んでいきます。

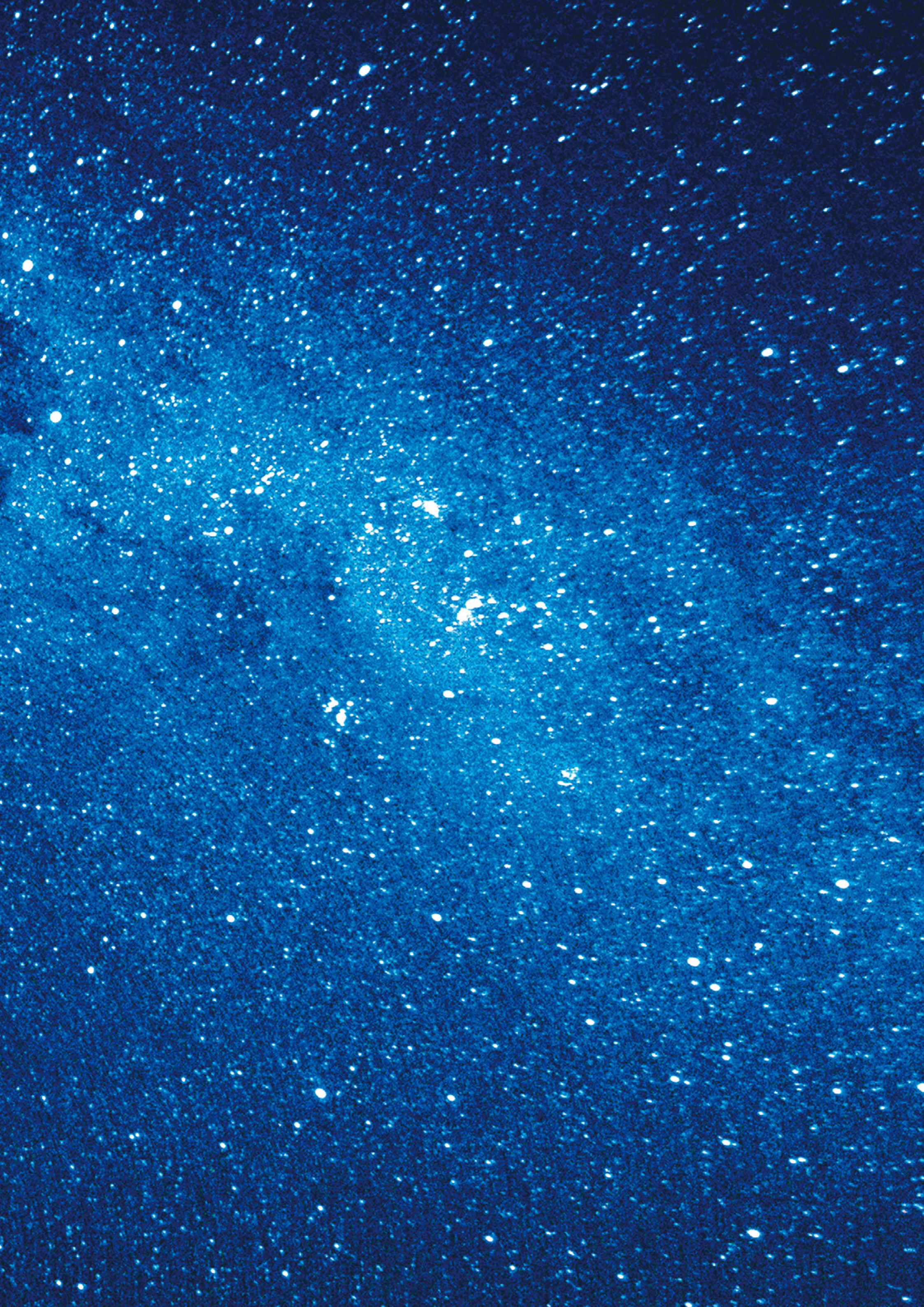
自らを見つめ直し、他者への思いやりを発動する。
自分だけでなく他の誰かの安らぎのために行動する。
それが、私たちが大切にしている
「自省利他」であり、「まごころ」です。
その心があれば、激しい変化の中でも本質を見極め、
変革への一歩を踏み出すことができるはず。

探究心が沸き上がる喜びを原動力に、
より良い社会を構築するために。
新しい価値を創造するために。

私たちは、大学を「心」と「知」と「行動」の拠点として、
地球規模で広がる課題に立ち向かいます。
1639年の創立以来、貫いてきた進取の精神、
そして日々積み上げる学びをもとに、様々な人と手を携えながら、
誠実に地域や社会の発展に力を尽くしていきます。

豊かな多様性の中で、心と心がつながる。人と人が支え合う。
その先に、社会の新しい可能性が生まれていく。
龍谷大学が動く。未来が輝く。

You, Unlimited



Ryukoku Magazine

2022 VOLUME 94

広報誌「龍谷」

01
P01
Feature Article
巻頭特集 学長対談
命も守る「知識は力なり」
京都大学名誉教授・
京都大学レジリエンス
実践ユニット特任教授 龍谷大学学長
鎌田 浩毅 × **入澤 崇**

02
P06
Ryukoku News
・岡田清孝 REC顧問「みどりの学術賞」を受賞
・2023年4月心理学部新設
・「キャンパスブランド構想」を推進
・2023年4月から農学部 2 学科の名称を変更

03
P10
People, Unlimited
遠い国の若者たちの笑顔のため
広がれ支援の輪
影裡 天音 さん 経営学部

P12
学びを止めず、待ちわびた海外へ
グローバルスタディーズ学科による新たな支援
梅村 航平 さん 国際学部

P14
キルギス共和国アク・ベシム遺跡調査に参加
偶然の雨で現れた遺構のライン
前田 詞子 さん 文学研究科

04
P16
Education, Unlimited
農学部と先端理工学部が協働
「アグリ DX 人材育成」を開始
大門 弘幸 教授 農学部長
外村 佳伸 教授 先端理工学部長

P20
チーム政策から生まれる
「話し合い」の可能性
村田 和代 教授 政策学部
地頭所 里紗 講師 政策学部

05
P24
Research, Unlimited
悲しみや不安を表現できる社会をめざして
社会的孤立回復支援研究センター（SIRC）を発足
社会的孤立回復支援研究センター長
黒川 雅代子 教授 短期大学部

P28
JAXA でも実験。独創的な「バルート」で
宇宙からの安全・安心に帰還をめざす
大津 広敬 教授 先端理工学部

06
P32
Event Ryukoku Museum
人はなぜ集めるのか
その思いに迫るひと味違う「博覧会」
和田 秀寿 龍谷ミュージアム学芸員

07
P34
Connect, Unlimited
龍谷大学をつなぐ対談
なにげない一瞬一瞬の幸せを大切に
キーウ大学 交換留学生 文学部
ロクソラーナ・オレクシュークさん × **山田 優菜** さん

08
P38
News & Topics
最新情報

09
P42
Book Café
新刊紹介

10
P44
My Campus
マイキャンパス

京都大学名誉教授・
京都大学レジリエンス
実践ユニット特任教授
鎌田 浩毅

×

龍谷大学学長
入澤 崇

命も守る「知識は力なり」

Feature Article
People, Unlimited
Education, Unlimited
Research, Unlimited
Connect, Unlimited
News & Topics

火山学、地球科学の学者として、南海トラフ巨大地震など自然災害に警鐘を鳴らす鎌田浩毅先生。仏教にも造詣が深く、入澤学長とも親交があったことから対談が実現した。

入澤：鎌田先生は、2021年3月に24年間教壇に立たれていた京都大学を定年退官されました。89万回以上も再生されている「京大最終講義」の動画も拝見いたしましたが、私は以前から、派手なファッションに身を包み、大学のみならず、メディアや全国行脚の“辻説法”で災害から命を守る術（すべ）を伝える「科学の伝道師」としての鎌田先生の姿に、一休さん（一休宗純）を照らし合わせていました。

鎌田：確かに学者でありながら広く市民に語りかける姿は一休さんになぞらえているかもしれません。彼の書を読むと知性と情熱を備え、当時の仏教界や社会を変えるべく意見し、広く人々に説法していますから。

入澤：では、巨大地震や火山噴火という超想定外の事態に、私たちはどう生きていくべきでしょうか。

鎌田：2035年の前後5年の間に南海トラフ巨大地震（西日本大地震）が確実に発生します。規模は東日本大震災の10倍。日本の人口の半分は被災し被害者は32万人を超える予測です。経済被害は220兆円と日本は壊滅状態に陥ります。あらゆる機能が停止し、誰も助けに来てくれませんから、残り10年ほどでの準備と自力自発的避難を訴えているのです。

入澤：鎌田先生が「京大最終講義」でも紹介されていた、ある若いサーファーが「津波がやってきたら、是非乗ってみたいです」と答えていた話には、恐ろしさを否めませんでした。

鎌田：私は「知識は力なり」と常々訴えています。災害から命を守るのは知識です。また知識はこれからどういう生き方をしたらよいか未来を示してくれます。

入澤：それは仏教の「末法思想」にも通じます。災害を自分事として捉え、準備する。災害後の世界の生き方を考える。地球科学と仏教はリンクしていると思います。

鎌田：地球科学は唯一無二の地球を対象とする特異的な学問です。時間軸も通常とは異なります。地球が誕生して46億年。そこから人類の誕生はわずか700万年。前回の富士山噴火はたった300年前と「長尺の目」で自然現象を捉える必要があります。その点で、仏教はブッダが量子力学に通じる「三千大千世界」を唱えるなど、科学を包含しています。

入澤：龍谷大学では、創立350周年記念事業として、日本の仏教系大学初の理工学部（現：先端理工学部）を開設したのですが、科学者である先生方が仏教に大きな関心を持っておられました。常に「長尺の目」で事象を捉え、追究されておられるからでしょう。そういった意味では、学生は広く社会を捉え、大きなスケールで学ぶことも必要ですね。

鎌田：今の若者たちは、何でもインターネットでさっと調べて、バーチャルで全てわかったつもりなんですね。「知識は力なり」にも通じますが、やはり本から学ぶことが重要。本を読んで知識を備蓄しておけば、災害時に命を守る方法、自分の生き方や新しい希望を見つけ出すこともできます。仏教の経典をはじめ、理系・文系、西洋・東洋を問わず『古典』は、素晴らしい内容にあふれているので、読むことをおすすめします。

鎌田 浩毅

京都大学名誉教授。京都大学レジリエンス実践ユニット特任教授。理学博士。1955年東京都生まれ。東京大学理学部地学科卒業。1979年通産省(現:経済産業省)に入省し、地質調査所で18年間火山と地質の研究。1997年京都大学大学院人間・環境学研究科教授。2021年より現職。専門は火山学、地球科学、科学教育。「京大人気No.1教授」「科学の伝道師」として知られ、メディア出演も多数。京大での最終講義の動画再生回数は89万回を突破(2022年9月上旬時点)。

入澤 崇
龍谷大学学長。1955年広島県因島生まれ。龍谷大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。専門は仏教文化学。1990年文学部仏教学科に着任。ベゼクリク石窟壁画の復元事業や数多くの仏教遺跡調査に従事。2004年から5年間アフガニスタン仏教遺跡学術調査隊の隊長を務める。龍谷ミュージアム館長、文学部長を経て、2017年4月に学長就任。

入澤：鎌田先生は、真っ赤なマグマの色のファッションがトレードマークですが、内面からもマグマのような情熱を感じます。

鎌田：内なるマグマとは、人間が生きるために必要なエネルギーです。これが減ってしまっては精力的に活動できません。ただ、このマグマは、仏教の煩悩であり、ポジティブにコントロールしなければなりません。

入澤：煩悩の三毒の一つ「無知」では、先出のサーファーのように、災害時に命を守ることができません。私たちは自らの内なるマグマ、煩悩を理解、自省しなければなりません。親鸞聖人は煩悩を直視しました。『浄土真宗の教え』は龍谷大学の『建学の精神』であり、「仏教の思想」は全学部の必修科目。学生は人間を良くも悪くも突き動かす煩悩に着目しています。2021年には卒業生が日常の「小さな煩悩」を社会のためになる「大きな煩悩（創造性）」に育てることを目的とした「煩悩とクリエイティビティ」というプロジェクトを発足させました。また、深草キャンパスには、障がいのある人たちが学生と協働し運営する「カフェ樹林」をオープン。ここに携わった卒業生が障がいのある若者の就職について考え、ともに靴磨き専門店「革靴をはいた猫」を経営しています。

鎌田：それは素晴らしいですね。人間を突き動かす煩悩、マグマという点で、私は東日本大震災の後、学生たちとボランティアに駆けつけたところ、たくさんの若い人が精力的に動いていました。オーストリアの心理学者、アルフレッド・アドラーは、人間が幸せを感じる要素の一つが「他者への貢献」と分析しています。龍谷大学のプロジェクトなどの動きも、3.11のボランティアも、貢献感によるものでしょう。災害は想定外の残酷な出来事ですが、人間を突き動かすきっかけにもなります。

入澤：協力や協働の気持ちも生まれますね。

鎌田：桂小五郎（木戸孝允）や西郷隆盛など、明治維新の志士が登場したのは安政の大地震直後。太平洋戦争末期の大震災や終戦後の焼け野原からは、松下幸之助や本田宗一郎などが登場し、技術立国日本を築きました。大地変動と社会変動は一致し、日本を蘇生させる若者が登場するのです。内なるマグマを社会貢献に活かすチャンスです。

入澤：災害に直面した際に、どうするかで自分の人生も、その後の社会も決まってきます。そして、誰かに手を差し伸べられるかは、日頃からの積み重ね、繋がりが必要。龍谷大学の学生をはじめ、多くの若者に支え合いの精神が醸成されつつあると感じています。

鎌田：私は災害への備えとして、家に水を用意するなどまずできることから始め、家族や友人など目の前の3人に防災・避難の心得と周りの人に手を差し伸べることを伝えています。知識を持って、災害の備えをしている人、未来の生き方を考えている人は生き延びることができるはず。その術を1人でも多くに伝播すれば、被災者を減らし、日本は生き残ることができるでしょう。

入澤：私たち人間は、自然災害に対して「微力」であっても、決して「無力」ではありません。若者はもちろんのこと、鎌田先生がおっしゃる通り、誰もが知識を力にし、多くの人と人が繋がっていくことで、どんな困難にも立ち上がり、また新しい日本を築き上げていけることを私は強く信じています。

02 Ryukoku News

岡田　清孝 氏（龍谷大学 Ryukoku Extension Center 顧問）「みどりの学術賞」を受賞

「みどりの学術賞」は国内において植物や自然保護の研究、技術の開発といった「みどり」について国民の造詣を深めるための学術上の顕著な功績を上げた個人に贈られるもので、2022年4月18日、天皇皇后両陛下御臨席のもと授賞式がおこなわれ、岸田総理大臣より表彰されました。「受賞の感激を皆さまとわかち合うとともに、植物科学の一層の発展に尽力したいと思います」と表彰後の岡田顧問。

岡田清孝氏は、2015年度から 2018年度まで本学農学部特任教授。2019年度からRyukoku Extension Center フェローを務め、2021年度に顧問に就任しました。

岡田顧問はこれまで「モデル植物シロイヌナズナを用いた植物分子遺伝学の確立と植物器官発生機構の解明」を研究。シロイヌナズナをモデル植物としてわが国で最初に研究に取り入れ、特に花や葉、根の形態形成や重力、光、接触等の物理的刺激に応答した成長制御に着目した遺伝学的研究において顕著な成果を上げました。その成果は、イネやダイズ、トマト等多様な農作物における形態形成機構の解明や生産性向上に関する研究の確立に繋がりました。また、国内外の植物研究者や大学院生を対象として新しい実験技術を示すワークショップ等を開催し、研究者ネットワークを構築したほか、特定領域研究の代表等を通じて、シロイヌナズナ研究を定着させました。これらの成果により、モデル植物を用いた植物科学研究の確立に多大な功績を示すとともに農業問題や環境問題の解決に繋がる植物科学の発展に大きく貢献。

天皇皇后両陛下御臨席での授賞式の様子（提供：内閣府）

5月10日には本学瀬田キャンパスにて開催された受賞記念セミナーで「遺伝子による植物の形作りの仕組みを調べる」をテーマに、研究の潮流や楽しさを講演しました。参加した学生からは「シロイヌナズナを用いて形作りの仕組みを解き明かした岡田先生のお話を聞き、これまでの研究の積み重ねを感じました。今後は先生のように、興味のある分野を追い求めていきます」という声が聞かれ、未来の研究者の心に火を灯す機会となりました。また、同月21日の創立記念・親鸞聖人降誕会法要においてみどりの学術賞受賞に伴う祝意伝達式を挙行。入澤学長より祝い品が授与され、大学全体で岡田顧問の功績を讃えました。岡田顧問は RECで研究を続け、仏教SDGsにもお力添えできればと応えました。

「研究には遊び心を」岡田顧問の言葉を胸に、学生や教職員によって本学がさらなる発展を遂げる日が楽しみです。

受賞記念セミナーで講演される岡田顧問

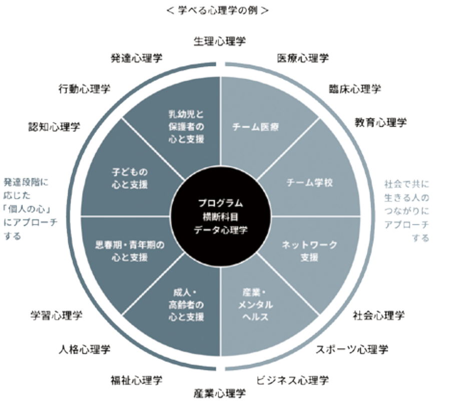
祝意伝達式にて入澤学長から祝い品を受け取る岡田顧問

2023年4月心理学部新設
ともに支え合う未来のため、心の繋がりを探究

龍谷大学は2023年4月に心理学部を新設します。目まぐるしく変化する現代社会で誰もが自分らしく生きて支え合うために、人との繋がりを深く理解し、ともに行動する人間を育てることが、龍谷大学心理学部がめざす教育のあり方です。

心理学の知識やスキルは広い領域で活用できます。本学部は、基礎から応用まで、思い描くキャリアや興味関心に合わせて学べるカリキュラムが特長です。1、2年次は、基礎を学ぶ「心理学基礎科目」、心の動きや行動を統計的に処理・分析する「データサイエンス科目」、実社会で心理学がどう活用されるのかを学ぶ「キャリア啓発科目」の3本柱から心理学へアプローチ。3、4年次では、発達段階に応じた人の心に迫る「生涯発達カウンセリングプログラム（4分野）」と社会でともに生きる人との繋がりを考える「関係支援とコミュニケーションプログラム（4分野）」の2つのプログラムでより専門的、発展的な内容を学びます。また、両プログラムを横断的に接続する「プログラム横断科目（1分野）」も開設。

卒業後は公認心理師や臨床心理士といった高度専門職はもちろん、民間企業や学校現場などあらゆる領域で、より良い社会づくりに貢献・活躍することが期待されています。



「キャンパスブランド構想」を推進
持続可能な社会の実現に向けた担い手育成を加速

　創立400周年を迎える2039年度に向けた長期計画「龍谷大学基本構想400」に基づき、本学が有する深草・瀬田・大宮の3キャンパスにおいて、教育研究環境の整備と特色化をおこない、機能・学びを充実させる「キャンパスブランド構想」を推進します。

　社会科学の英知を結集し、新たな知や価値を創出する「深草キャンパス」、自然科学を中心に社会課題に向き合い価値創造や社会変革を牽引する「瀬田キャンパス」、人文科学の諸領域での学びと研究を深化させる「大宮キャンパス」と各キャンパスを位置づけます。

　2020年度の先端理工学部設置（瀬田キャンパス）をはじめ、2023年度に心理学部を新設（大宮キャンパス）、2025年度には社会学部・社会学研究科が瀬田キャンパスから深草キャンパスへ移転する予定です。移転後の瀬田キャンパスでは、地球規模の環境問題など深刻な課題解決に向け、本学の教学資源を最大限に活用した取り組みを進めてまいります。

2023年4月から農学部2学科の名称を変更

植物生命科学科 → 生命科学科
資源生物科学科 → 農学科

　龍谷大学は、最先端の学びを充実するとともに進化する教育内容を的確に表すため、2023年4月から農学部4学科のうち2学科（植物生命科学科、資源生物科学科）の名称を変更します。

生命科学科

　近年の農学における基礎科学分野の進展と拡大に伴い、植物のみならず微生物、動物の生命現象やゲノム工学のような応用科学分野を包括する「生命科学」に関する最先端の学びを展開。

農学科

　農作物の生産システムを設計する作物学、園芸学、栽培学。生産技術を支える分野である育種学、土壌学、植物栄養学、植物病理学、昆虫学、雑草学など農学の根幹をなす教育を実施。

　上記教育内容の発展とともに、農学部は先端理工学部と連携・協働し、農学実習において低炭素社会を実現するデジタルマインド・スキルを持った「アグリDX人材」育成の取り組みを開始。デジタルサイエンスに関する体系的カリキュラムの構築、実習カリキュラムの高度化を企図。地域社会や産業界に広く普及できるDX人材の育成をおこないます。

03 People, Unlimited

経営学部 経営学科 2 年生（龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター 学生スタッフ）
和歌山県立神島高等学校 出身
影 裡　天 音 さん

募金活動をおこなう学生スタッフたち。左から影裡天音さん、太田雄斗さん、松嶌和奏さん

4 質の高い教育をみんなに

遠い国の若者たちの笑顔のため 広がれ支援の輪

ロシアによるウクライナ軍事侵攻のニュースに触れ「自分たちにも何かできないか」と動き出した学生たちがいた。影裡天音さんも所属する龍谷大学ボランティア・NPO活動センターの学生スタッフたちである。

影裡さんがこの企画に携わったきっかけは、仲間の太田雄斗さん（文学部2年）に「学生スタッフとして何か行動してみないか」と声をかけられたこと。太田さんは2022年3月、同センターが企画したウクライナを知るためのオンライン講演会「IMAGINEウクライナを知る・考える」に参加していた。自分と歳の近いウクライナ出身の若者の生の声や避難民の課題などを聞いて、まずは一歩動いてみることを決意したのだという。太田さんと、影裡さん、松嶌和奏さん（文学部2年）の3人で話し合い、今すぐにできる行動として、学生による募金活動を決めた。寄付先は龍谷大学がおこなう「ウクライナへの人道支援募金」。

影裡さんは最初、不安があった。自分にとっては企画立案も募金活動も未知のこと。わずかな募金に本当に意味があるのだろうか、現地で正しく活用されるのだろうか。そんな思いを抱えながらも「でもまずはやってみようじゃないか」という太田さんの声で、企画副責任者として前に進み始めた。

4月にプロジェクトを立ち上げ、学業のかたわら夜間にも打ち合せ。関係各所と交渉し、スケジュール、スタッフ募集方法、広報手段などを、初めて向き合う企画書にまとめ、4月末のミーティングで提案。センターでは快く採用され、主要メンバーも8人に増えていた。

実施は5月23日から6月2日までの2週間のうち5日間の昼休み20分。一般学生含め延べ64名の学生が3キャンパスで募金の呼びかけをおこなった。多くの学生・教職員が足を止め募金に協力。5日間で20万円を超える金額を集め、大学に目録を贈呈した。

「やってみると、気持ちを寄せている人がこんなにいたんだと気づけました。また、金額やお金の行先といった直接の成果だけではなく、募金箱を持って声を出す姿自体が誰かの心に届き次の行動に繋がるかもしれないという、計れない成果も大切だと実感しました」

影裡さんは、初めての企画遂行で学んだノウハウを仲間たちにシェアしながら、次なる活動へと歩んでいる。

03 People, Unlimited

国際学部グローバルスタディーズ学科 4 年生
京都産業大学附属高等学校 出身

梅村 航平 さん

ボストンPBL研修で現地調査を実施する学生たち

学びを止めず、待ちわびた海外へ グローバルスタディーズ学科による新たな支援

1学期以上の留学が必修とされている国際学部グローバルスタディーズ学科（以下GS学科）。2020年以降、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、留学を予定していた多くの学生がやむを得ず渡航を断念。龍谷大学はオンライン留学ができるよう海外の提携大学と連携し、学生の学修機会の確保に努めてきた。しかし、やむなくオンライン留学を選択した学生にも現地に渡航してもらいたいとの学部の思いから、2021年度の春休みにGS学科独自のフォローアッププログラムを実施し、ようやく海外渡航が再開。梅村航平さんをはじめ8名の学生が2022年2月、ボストンPBL研修に参加した。

本研修のメインプログラムは、アメリカ発祥の地であるとともに最先端の産業を生み出すボストンで、ハーバード大学、MIT（Massachusetts Institute of Technology）といった一流の大学での特別講義の受講と関心のあるテーマごとにチームを組み、現地でのインタビューを含むリサーチとプレゼンテーションに取り組むPBL（課題探究型学習）アクティビティだ。梅村さんのテーマは「京都とボストンの街の比較」。渡航前にプログラムディレクターからアドバイスをもらいながらインタビューの訪問先など現地での調査計画を立てた。計画に沿って日夜調査と発表準備に励み、プレゼンテーション後にはハーバード大学生からの質問にも答えた。プログラムディレクターからの熱いフィードバックも今後に活きてくるだろう。研修を終えて「プログラム自体の質が高く、長い間待った分、学修意欲のあるメンバーとともに学ぶことができて貴重な経験になりました」と振り返る。

2023年からは、国際学研究科への進学を予定し、すでにイギリスのハートフォードシャー大学へ1年間の交換留学も内定。現在学んでいる「服が持つコミュニケーション」について学びを深める。「海外の文化や考えに触れて、自信を持って行動し、自分のやりたいことや意見をしっかり伝えることが大切だと思いました。また、行きたい場所ややりたいことをしやすい場所があればそこに自由に行けばいいんだと考えるようになりました。今後もその時やりたいと思ったことに挑戦できるよう、勉強や経験を積み重ねたいです」と梅村さん。コロナ禍による影響は大きいが、そのなかでもプラスのエネルギーは確かに生まれている。

03
People, Unlimited
文学研究科 日本史学専攻 修士課程 2 年生
滋賀県立高島高等学校 出身
前田　詞子　さん

キルギス共和国アク･ベシム遺跡調査に参加 偶然の雨で現れた遺構のライン

中央アジアに位置するキルギス共和国に、アク･ベシムというユネスコ世界遺産に登録されている遺跡がある。6世紀頃より500年にわたってシルクロードの中継地として栄えた国際商業都市であったアク･ベシムでは、ソグド人をはじめ多様な民族が暮らし、さらにはキリスト教徒、仏教徒、ゾロアスター教徒など異宗教が共存していたという。考古学ファンならロマンを掻き立てられずにはいられないアク･ベシムだが、未だ解明されていないことも多い。これまで帝京大学をはじめとする日本の研究機関が調査をおこなってきたが、本学でも岩井俊平准教授（龍谷ミュージアム）が調査に関わってきたことから、2022年4月に初めて龍谷大学独自の調査隊を結成。1950年代に発掘された仏教寺院趾に隣接する地点を調査するため、4名の研究者が現地に飛んだ。そのうち唯一学生として参加したのが、前田詞子さんだ。

「私は滋賀をフィールドに朝鮮渡来人の手による瓦の研究をしているのですが、担当教員の指導を受けて遺物のトレースや図面描きなどをよくしていた経験から、記録係として参加させてもらえることになりました」

期待に胸を膨らませて遺跡に到着した前田さんだったが、調査予定地に広がっていたのは、一面の麦畑。「これが西暦630年、玄奘三蔵が訪れた地なのか。はるか遠くに天山山脈をひかえた広大な平原に遺跡は埋もれ、シルクロードを往来する当時の喧騒はもう全て失われてしまったかのようにも見えました。本当にここに遺構があるのだろうか？と不安になりましたが、2日目の夜から雨が降り、そのおかげで翌朝には遺構のラインがはっきりと現れたのです。全員大急ぎで記録を取り、私も土層図や平面図を作成しました」

今回の調査では、粘質土を層状に積み上げた遺構を確認し、仏教寺院跡の解明への手掛かりを得ることができ、今後に繋がる大きな成果を上げることができたが、前田さんが何より感動したのは、第一線の研究者たちの熱意だったという。

「毎晩、宿に帰ってからも考古学の議論をしているんです。そんな考古学の情熱にあふれた研究者に囲まれ、語らいの場に触れたことは何よりも生きた学びになりました」

異国の風に吹かれながら、情熱を傾けた日の記憶は、きっと彼女にとって生涯忘れられない思い出になるはずだ。前田さんは2023年春に大学院を修了し、文化財保護に関わる仕事を志す。

アク・ベシム遺跡で土層図を作成する前田さん

「アグリDX人材育成事業」Webサイト
https://www.agr.ryukoku.ac.jp/sdx/

04 Education, Unlimited

農学部長
大門　弘幸　教授

先端理工学部長
外村　佳伸　教授

農学部と先端理工学部が協働「アグリDX人材育成」を開始

地球規模の課題解決に向けて

龍谷大学では、2022年度から、農学部と先端理工学部の連携・協働による、低炭素社会を実現するデジタルマインド・スキルを持った「アグリDX人材」の育成をスタート。これは文部科学省の大学改革推進等補助金（デジタル活用高度専門人材育成事業）「デジタルと専門分野の掛け合わせによる産業DXをけん引する高度専門人材育成事業」の採択を受けた取り組みである。

「事業の話を聞いた瞬間、実現できるのは私たち農学部と、情報科学進展の最先端である先端理工学部を有す、龍谷大学瀬田キャンパスしかないと思いました。農学部は2015年の創設以来、農作物の生産・加工・流通・消費・再生という『食の循環』を学び、日々の食卓から地域、地球規模での食と農を担う人材を育成しています。そのなかで、デジタル技術は就農者の高齢化、労働力不足、脱炭素化といった昨今の農業の課題解決に不可欠。農学部の実習農場である牧農場や各研究室では、多様なデータ採取・活用がなされています。より効率的かつ実用性に優れたデータの採取と新たな活用の方法や、それらを依然としてアナログ作業が主流の農業現場にどう還元していくのか。農業のDX化について常日頃から先端理工学部長の外村佳伸教授に進言を求めていたことも両学部の協働に結びつきました」と語る大門教授。一方、外村教授も今後の情報科学について課題を抱いていた。

「数字のみの表面的なデータを追求し、エビデンスを示すことが情報科学＝データサイエンスではありません。これだけデータサイエンスの活用やDX化が進む今こそ『手で触れることのできるようなデータの採取』『地に足のついたデータの解析・活用』が重要です。そういった意味で、今回の協働は、先端理工学部の学生への相乗効果も計り知れません。例えば、通常の授業で扱う、公的な統計などのオープンデータとは異なり、身近な農学部の学生が自分たちの農場で採取した、まさに生きたデータを解析し、活用の結果をリアルに把握できることはとても新鮮で、かつデータの背景の理解、活用後の効果の見極めにも繋がり、学びへの意欲向上も促すはず。大門先生が挙げられた課題に対しても、より高度なデータの活用や実装方法をフィードバックすることが可能です」

牧農場で資材散布用ドローンを使用した実習の様子

多様なコラボで新たなイノベーションを

アグリDX人材育成の取り組みは、農学部の「作物生産、農耕地保全、食品加工に関する実習」と、先端理工学部の「デジタル技術やデータ分析手法に関する実習」が相互補完し、デジタルマインド・スキルを修得していく。その第1弾として、2022年5月、牧農場で農学部1年生約450名が田植え実習を実施。農業散布用ドローンや自動操舵トラクター、水位・水温データをクラウドに蓄積できる水田センサーなども導入し、農学部の実習を高度化していく。もちろん、採取した各種データは農学部の学生が解析・分析して農場での実習に活用していく。さらに農業領域、ロボティクスやエネルギーなどは先端理工学部の領域とも関連。例えば、実習に環境分野を専門にする環境生態工学課程の学びはダイレクトに関係。農と食の低炭素化対策をはじめ、世界的にも注目されている先端理工学部の琵琶湖一帯の水質環境DNA研究を農耕地改善に展開するなど多様なコラボが実現できると大門教授。

「日本の田植え機誕生時には開発者たちが実際に水田に入り、最適な苗の植え方を体験したはずです。アグリDX人事育成の取り組みにおいてもそういった“体験・実感”からのイノベーションを実現していきたい。また、

牧農場で自動操舵田植え機による作業を体験する学生たち

2022年4月に完成した瀬田キャンパス『STEAMコモンズ』で両学部生が自主的に出会い、新たなアイデア、ベンチャーなども創出されるといいですね」と外村教授は協働での“化学反応”にも期待を寄せる。

1年間の採択事業終了後も「アグリDX人材育成」は龍谷大学のコアな活動として継続予定。生育や収量の向上、温室効果ガス削減などに関する知見を「瀬田モデル」とし、就農者はもちろん、地球温暖化などの課題解決を図るリソースとして地域社会などに発信していくことも構想。瀬田キャンパスは未来の農業、社会の変革に貢献する人材の育成に向けてまた新たな一歩を踏み出した。

大門 弘幸

大阪府立大学大学院農学研究科園芸農学専攻博士後期課程修了。大阪府立大学を経て2015年4月より現職。長年マメ科作物と根粒菌の共生などを研究する作付体系の専門家。世界の食糧危機を乗り越えるべく、持続可能な環境負荷の少ない作物生産技術の開発をめざして研究をおこなっている。「サイエンスに基づいた現場主義」を大切にし、千葉、京都、宮古島などで現地試験を遂行。2005年第51回日本作物学会賞、2020年根研究学会学術功労賞受賞。

外村 佳伸

京都大学大学院情報学研究科知能情報学博士課程修了。1981年日本電信電話公社横須賀電気通信研究所研究員。1987年米国MITメディア研究所客員研究員。2006年NTTコミュニケーション科学基礎研究所所長を経て2010年龍谷大学理工学部(現先端理工学部)教授。研究分野(情報通信・知能情報学)。2000年電子情報通信学会論文賞。2000年情報処理学会論文賞。2003年デジタルメディア協会AMDアワード2002技術賞。

04 Education, Unlimited

政策学部政策学科
村田　和代　教授

政策学部政策学科
地頭所　里紗　講師

チーム政策から生まれる「話し合い」の可能性

実践・観察・振り返りで能力を養成

　2020年に創設10周年を迎えた政策学部。学生・教職員が一丸となる「チーム政策」を掲げ、PBL/CBLやプロジェクトなどを通じて、社会や地域の課題発見・解決に取り組む「地域公共人材」を育成してきた。その礎を築く授業の一つが2年生の履修指導科目「コミュニケーション・ワークショップ演習（以下CWS演習）」。発言が軸ではなく「話し合い能力」を醸成することが特長だ。卒業生たちの多くがこの能力を現場で発揮。新たな動きとして、2020年に政策学部同窓会の有志が地域公共人材として学びと議論を続けたいと「synlogue=共話」から命名したディスカッションメディア『syn（シン）』を立ち上げた。そこでの議論をまとめた雑誌『syn magazine』が2022年度からCWS演習に取り入れられている。

　「多様な課題解決には、立場や価値観が異なる他者と『つながる』、対話によって共感、理解を『ひきだす』、合意と連携・協働を『うみだす』が不可欠。そこで求められるのが話し合い能力です」と語る村田和代教授。専門である社会言語学の視点から話し合いを体系化し、学部創設翌年からのCWS演習実施に尽力した。

　CWS演習では、まず話し合いのルールを学修。論点などを付箋に書いて整理していく「KJ法」という手法も修得していく。次に6人程度のグループで、設定テーマの話し合い、別グループの話し合いの観察と分析。その後、両グループで検証していくのだが、着目するのは話の内容ではなく、場の様子、発言する、話を聴く、振るといった個々の言語行動。「単に話し合いを繰り返すだけでは能力は身につきません。実践・観察・振り返りによる変容的学修によって能力が養われていきます」と村田教授は言う。

　CWS演習は『学習ポートフォリオ』をもとに授業をおこなう。2021年度から担当する地頭所里紗講師は、話し合いの姿勢や言語行動における学生の劇的な変化と成長に、話し合い能力は天賦の才能に起因するのではなく、学修によって修得可能であること確信したという。

　「例えば、一方的に発言を続けていた学生が、同じように発言を続ける学生を見て、自分を顧みるように。この話す・引くのバランスは話し合いに大切な要素です。他者に心を配り、意見を受容することで、人との関わり方が優しくなっていくこともCWS演習の効果と実感しています」

4 質の高い教育をみんなに

16 平和と公正をすべての人に

17 パートナーシップで目標を達成しよう

同窓会（有志）が創刊した雑誌『syn magazine』を授業に取り入れる

政策学部・政策学研究科創設10周年記念サイト
https://www.policy.ryukoku.ac.jp/10th/

syn-問いを深め合うディスカッションメディア
https://s-y-n.jp/

卒業生も連携。新たな話し合いを創出

CWS演習では3年生以上の学部生や大学院生がLA（教育補助員）として授業をサポート。全15回の学びの集大成として、学生たちは『働くとはどういうことか』とのテーマについて企業などにインタビュー。内容を考察・検証し、教職員や連携企業にプレゼンテーションするのだが、一般社団法人京都中小企業家同友会に勤務する政策学部卒業生がインタビュー先を紹介するなど、卒業生が協力していることも「チーム政策」らしさだ。

また、冒頭で紹介したディスカッションメディア『syn』は、「日々変化する社会問題に向き合い、議論を続けること」をコンセプトに、1年間に1つの問いだけを探究するWebメディアだ。その第1回目のテーマに選ばれたのが「よい話し合いとは何か」。社会・地域の話し合いのキーパーソンに取材し、実践知を公開。チャットアプリを使って誰もが参加できるディスカッションの場を設け、随時議論が展開されているのも特長の一つだ。学生たちは『syn』での議論をまとめた雑誌『syn magazine』を話し合いのテキストとして役立てている。

「CWS演習初期に受講した卒業生が話し合いを最初のテーマに選んでくれて光栄です」と村田教授。実社会で良い話し合いを構

コミュニケーション・ワークショップ（CWS）演習の様子

築し、より良い社会・地域づくりをかなえる卒業生の活躍に、CWS演習をはじめ、「チーム政策」の学びが10年を経て、大きく結実していることも感慨深いという。

　オンラインの活用をはじめ、今、社会では話し合いのスタイルが大きく変化している。それらに応じて教員間では『学習ポートフォリオ』を随時更新しているが、「CWS演習は、良い話し合いのための参加者精神の醸成、対話での他者への思いやり、そしてチーム政策の良いところを継承していきます」と語る地頭所講師。これからの10年も、「チーム政策」からはより良く、より熱く、対話を通じて課題を解決する地域公共人材が巣立っていく。

村田 和代
ニュージーランド国立ヴィクトリア大学大学院言語学科Ph.D.（言語学博士）。専門は社会言語学。2001年龍谷大学法学部着任。2011年政策学部創設により政策学部准教授。2012年同学部教授。2017年龍谷大学グローバル教育推進センター長。2019年龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター長。

地頭所 里紗
神戸大学大学院経営学研究科修了、博士（商学）。専門は国際マーケティング、消費者行動。2017年関西外国語大学外国語学部助教。2020年龍谷大学政策学部講師。主担当科目は国際ビジネス論、価値創造論。2022年度コミュニケーション・ワークショップ演習運営委員。

「社会的孤立回復支援研究センター」Webサイト
https://sirc.info/

05 Research, Unlimited

社会的孤立回復支援研究センター長
短期大学部 社会福祉学科
黒川 雅代子 教授

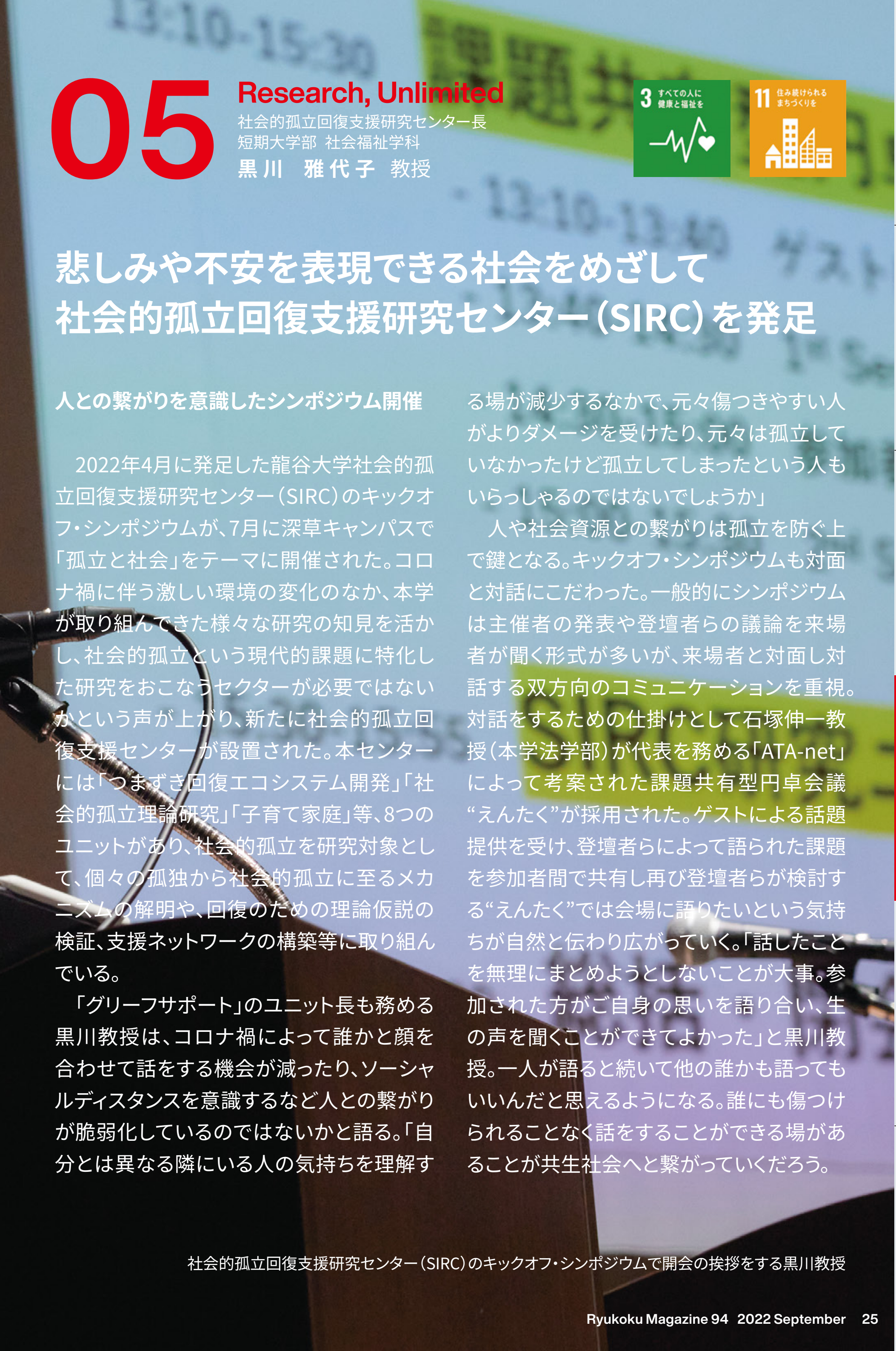
悲しみや不安を表現できる社会をめざして 社会的孤立回復支援研究センター（SIRC）を発足

人との繋がりを意識したシンポジウム開催

2022年4月に発足した龍谷大学社会的孤立回復支援研究センター（SIRC）のキックオフ・シンポジウムが、7月に深草キャンパスで「孤立と社会」をテーマに開催された。コロナ禍に伴う激しい環境の変化のなか、本学が取り組んできた様々な研究の知見を活かし、社会的孤立という現代的課題に特化した研究をおこなうセクターが必要ではないかという声が上がり、新たに社会的孤立回復支援センターが設置された。本センターには「つまずき回復エコシステム開発」「社会的孤立理論研究」「子育て家庭」等、8つのユニットがあり、社会的孤立を研究対象として、個々の孤独から社会的孤立に至るメカニズムの解明や、回復のための理論仮説の検証、支援ネットワークの構築等に取り組んでいる。

「グリーフサポート」のユニット長も務める黒川教授は、コロナ禍によって誰かと顔を合わせて話をする機会が減ったり、ソーシャルディスタンスを意識するなど人との繋がりが脆弱化しているのではないかと語る。「自分とは異なる隣にいる人の気持ちを理解する場が減少するなかで、元々傷つきやすい人がよりダメージを受けたり、元々は孤立していなかったけど孤立してしまったという人もいらっしゃるのではないでしょうか」

人や社会資源との繋がりは孤立を防ぐ上で鍵となる。キックオフ・シンポジウムも対面と対話にこだわった。一般的にシンポジウムは主催者の発表や登壇者らの議論を来場者が聞く形式が多いが、来場者と対面し対話する双方向のコミュニケーションを重視。対話をするための仕掛けとして石塚伸一教授（本学法学部）が代表を務める「ATA-net」によって考案された課題共有型円卓会議“えんたく”が採用された。ゲストによる話題提供を受け、登壇者らによって語られた課題を参加者間で共有し再び登壇者らが検討する“えんたく”では会場に語りたいという気持ちが自然と伝わり広がっていく。「話したことを無理にまとめようとしないことが大事。参加された方がご自身の思いを語り合い、生の声を聞くことができてよかった」と黒川教授。一人が語ると続いて他の誰かも語ってもいいんだと思えるようになる。誰にも傷つけられることなく話をすることができる場があることが共生社会へと繋がっていくだろう。



社会的孤立回復支援研究センター（SIRC）のキックオフ・シンポジウムで開会の挨拶をする黒川教授

誰もが安全な場所に出会うために

救命救急センターの看護師をしていたという黒川教授。たくさんの人が命を落とす現場で人の生と死について改めて考え大学に通い直し、学びを深めてきた。2009年に遺族会ミトラを設立。大切な人を亡くした悲しみを支え合う活動を展開する。最近では新型コロナウイルス感染症の遺族支援にも力を入れている。本センターの「グリーフサポートユニット」において遺族会のネットワークの構築と若者の自死について研究する。黒川教授は、これまでの活動を振り返り、愛情表現の仕方をたくさん教えてもらったと語る。「大切な誰かを失った時に感情が動くのは、愛情が根底にあり、人と人の繋がりがあったからですよね。故人への愛情は人それぞれで、人が聞くと驚くような言葉を遺族の方が発したとしても、それはその方の愛情表現の方法なので、私は大切に受け止めたいと思っています。遺族が安心して素直な気持ちを表現できる場所は必要ですね」

安全な場所を提供するだけでなくしっかりと遺族に有益な情報を届けることも重要だ。より良い場づくりや知識の向上のため、遺族会同士の情報交換の活発化や遺族会に参加しやすくなるようネットワークを関西から全国へ広げていきたいと計画中。また、仏事、

登壇者による“えんたく(課題共有型円卓会議)”の様子

葬儀の簡略化やゲーム内で当然のように生き返るキャラクター等、幼い頃から死が見えにくい環境にいるからか若者は死に対する恐怖感が薄いように感じると黒川教授。「京都府が2021年から始めた自死対策カレッジ会議等、生死について考える場に多くの学生が参加し、隣にいる人の気持ちを理解し合える文化や風土が生まれれば」と話す。

社会的孤立は人と繋がる場の少なさや「助けて」と声を上げにくい社会構造が大きく絡んでいる。本センターの多領域ユニットが横軸で交流し、研究を深めていくことで、この社会課題解決へ向けたアプローチが生まれていくと期待を寄せている。

黒川 雅代子

関西学院大学大学院人間福祉研究科博士後期課程修了。博士(人間福祉)。救命救急センターの看護師を経て2017年より現職。研究テーマは遺族支援のための実践モデル開発。関西遺族会ネットワーク、遺族会ミトラ代表。京都府警察被害者等支援アドバイザー。著書に『あいまいな喪失と家族のレジリエンス』(2019年/誠信書房)など。

05 Research, Unlimited

先端理工学部　機械工学・ロボティクス課程
大津　広敬　教授

JAXAでも実験。独創的な「バルート」で宇宙からの安全・安心な帰還をめざす

ミッションは猛烈な熱の軽減

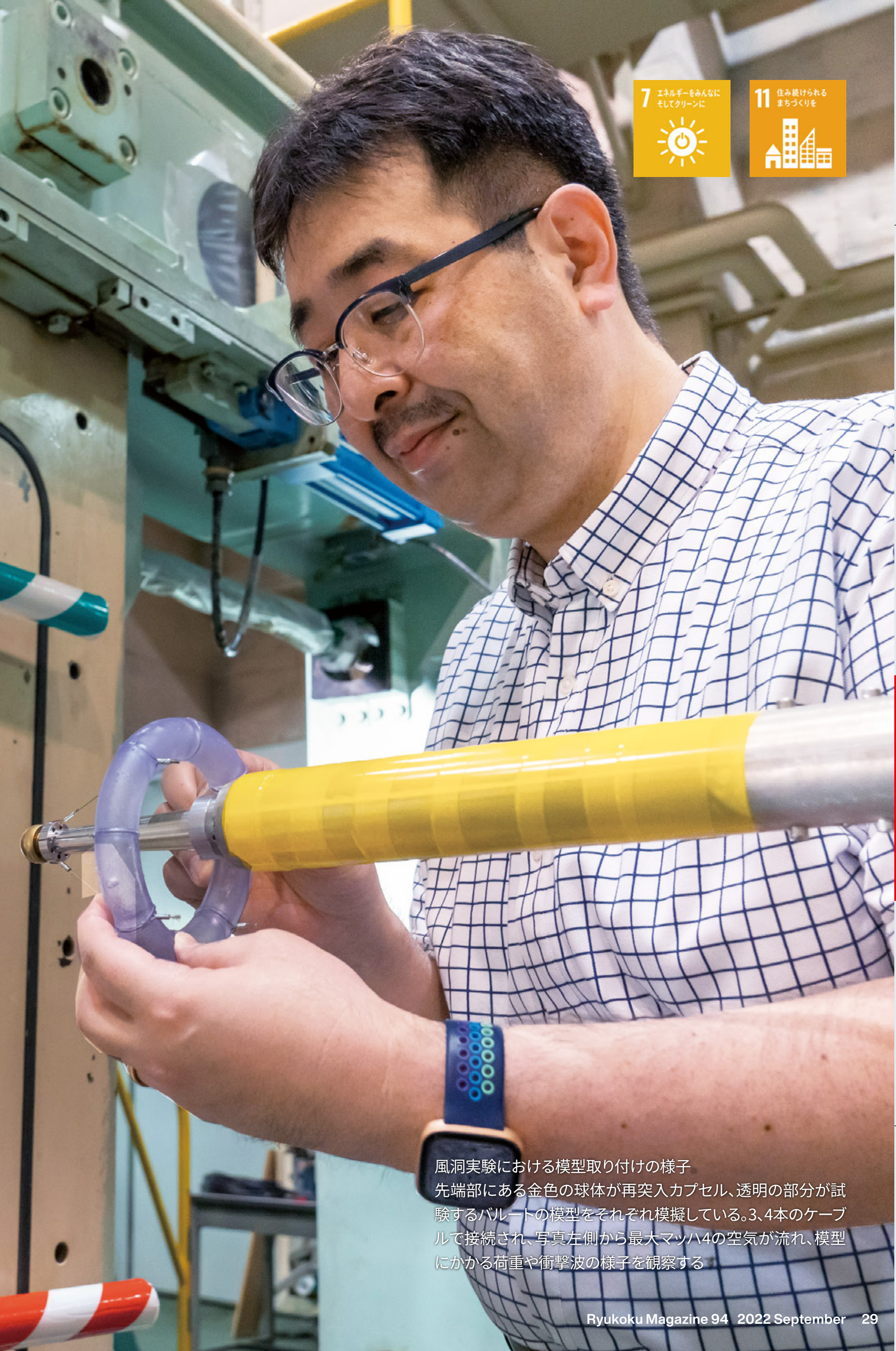
2010年6月、小惑星探査機の初代「はやぶさ」が無事帰還。日本はもちろん、世界からも喝采されたが、この帰還を固唾を飲んで見守っていたのが大津広敬教授。1996年、東京大学大学院在籍中に宇宙科学研究所（現国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構 以下JAXA）との共同研究に参画。「はやぶさ」が採取した小惑星サンプルの入ったカプセルが大気圏突入時にどの程度の熱を受けるのかをシミュレーションしたのが当時の大津教授たちのチームだった。「万一、燃え尽きた場合、責任問題になるかもしれないと当時の恩師から帰還前日にメールが届いて、本当に緊張しました」

「はやぶさ」のカプセルなど地球に帰還する飛行体は、秒速10km以上と、とてつもない速度で大気圏に再突入する。この時、運動エネルギーが熱エネルギーに変換。飛行体前面には圧力が急激に増加し超音速で伝播する強い衝撃波が現れ、数万度という非常に高温の空気に晒されてしまう。

「この現象を空力加熱といい、大気圏再突入飛行体の設計において、空力加熱から飛行体を守ることが重要な課題です」

そこで大津教授が取り組んでいる研究が「守る」から一歩進んだ、大気圏再突入時に飛行体が受ける空力加熱を「軽減する」方法だ。現在、二つの視点から研究を進めており、大津教授のキャリアとネットワークから、関西圏の大学では唯一龍谷大学だけが、JAXA相模原キャンパス・高速気流総合試験設備で、定期的かつ継続的に実験をおこなっていることも特筆すべき点だ。

2022年6月に実施したJAXAでの実験には、大津研究室の学部生、大学院生など5名が参加した。実験にあたって、学生たちは先端理工学部に完備された光造形3Dプリンターを用いて、レジンという柔軟構造物で再突入カプセル試験模型を作成。それらを実際の飛行状態に相当するマッハ4という超音速気流を起こすJAXAの風洞装置に設置し、飛行体周りに発生する衝撃波の様子、飛行体にかかる圧力、温度を計測。事前におこなった数値流体シミュレーションでの解析結果と比較したところ、「ほぼ同様の現象が発生し、有用なデータが得られました」と大津教授。こういった実験・検証の積み重ねにより、再突入により適した飛行体の構造設計、飛行体が受ける空力加熱の予測など、実用への展開をめざしていく。



風洞実験における模型取り付けの様子
先端部にある金色の球体が再突入カプセル、透明の部分が試験するバルートの模型をそれぞれ模擬している。3、4本のケーブルで接続され、写真左側から最大マッハ4の空気が流れ、模型にかかる荷重や衝撃波の様子を観察する

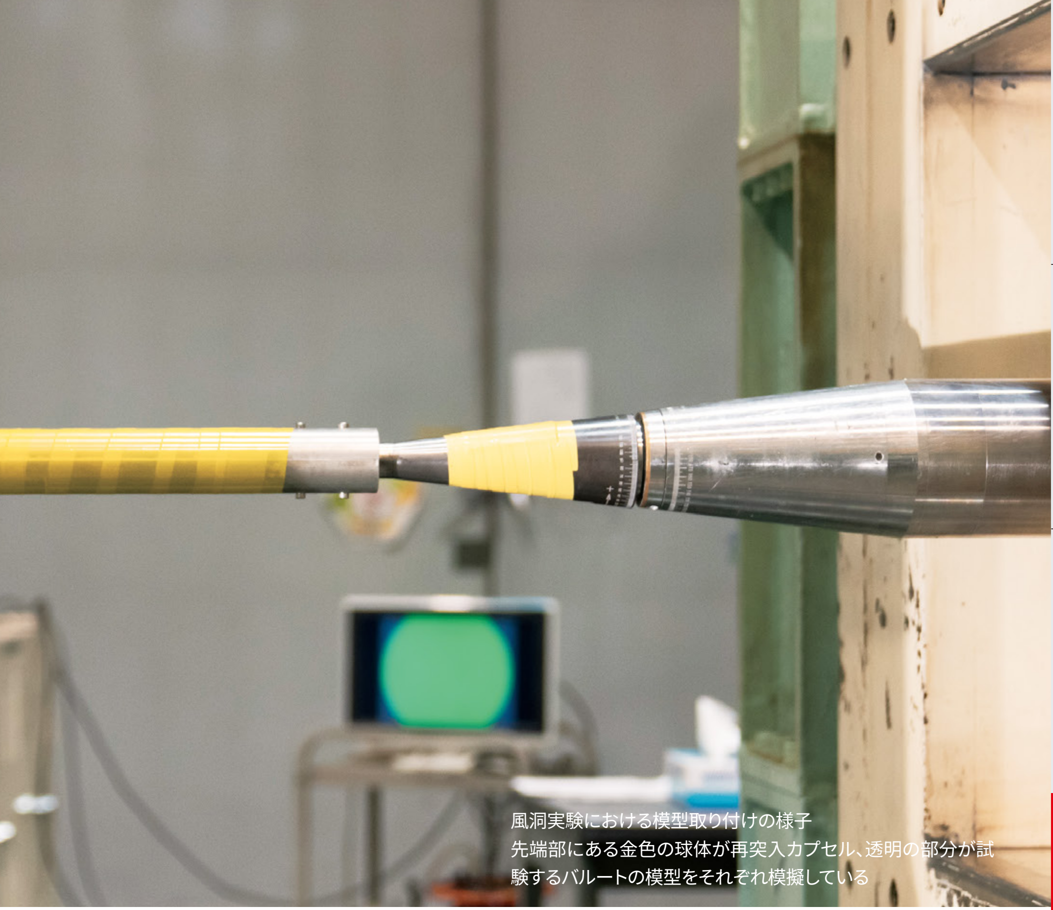
「バルート」でゆっくり・ふわり帰還

JAXAでの風洞実験では、「バルート」の検証も実施した。このバルートとは、バルーン（風船）とパラシュートを組み合わせた造語。大気圏再突入の前に飛行体の後方にパラシュートのように放出し、バルーンのようにガスを注入して膨らませることで、減速を促す浮き輪状の空力デバイスである。

「空力加熱を軽減するには、大気圏突入前の高高度での減速が有効です。ただ、はやぶさのカプセルでも直径40cm、高さ20cm、質量17kgと小さく、速さは重さと大きさで決まるため、減速装置の搭載は理論上も物理的にも不可能。そこで飛行体の重さはそのまま大きささを変化させ、あえて空気抵抗を増加することで効率良く減速に利用し、より安全な自然落下をめざしています」

大きく軽いバルートの実現には、柔軟なのに丈夫な材質、形状であることが要求される。そのため、丸い浮き輪状ではなく、耐久性と折りたたみやすさ、成形のしやすさも鑑みて、筒状パーツを繋いでの六角形や八角形、消防士の耐火服に用いられる耐熱素材なども検討している大津教授。

「バルートが変形すると、飛行体の姿勢安定性や飛行経路の予測などに影響します。今回の実験では、学生が3Dプリンターで作



風洞実験における模型取り付けの様子
先端部にある金色の球体が再突入カプセル、透明の部分が試験するバルートの模型をそれぞれ模擬している

成した柔軟構造物のバルートをカプセル模型に装着し、バルート周りの衝撃波の形状、衝撃波や圧力によるバルートの変形を観察。どうすれば変形を抑制できるか、どのような材質、形状が最適か、実験結果やシミュレーションなどによって明らかにしていきます」

実はバルートによる空力加熱軽減の研究は稀。低コストかつ容易に高精度の実験モデル作成が可能で、実験の精度向上も図れる3Dプリンターを積極的に活用しているのも珍しいという。今後の宇宙探査、宇宙開発はもちろん、大津教授の唯一無二の研究と成果が有人飛行体の安全・安心な帰還にも活用される日がくるはずだ。

大津 広敬

京都大学工学部航空工学科卒、東京大学大学院工学系研究科航空宇宙工学専攻博士課程修了、静岡大学工学部機械工学科助手・准教授、2009年龍谷大学理工学部機械システム工学科准教授を経て、2017年より現職。

06 Event Ryukoku Museum

人はなぜ集めるのか
その思いに迫るひと味違う「博覧会」

秋季特別展
『博覧―近代京都の集め見せる力―』
初期京都博覧会・西本願寺蒐覧会
仏教児童博物館・平瀬貝類博物館
2022年9月17日(土)～11月23日(水・祝)
主催:龍谷大学 龍谷ミュージアム、京都新聞

誰もが一度は経験のあるコレクション。「集める」という欲求は、好奇心や満足感、探求心、そして披露へと思いが膨らむことがある。この披露の思いが大規模に昇華した一つが博覧会。古今東西を問わず、博覧会は随時開催されているが、1871(明治4)年に西本願寺書院にて、日本初の「京都博覧会」が開催されたことをご存じだろうか。当時の京都は明治維新の影響で荒廃していたが、多くの観覧者が集まり、稀少な所蔵資料を堪能したという。さらに、1875年から1910年まで西本願寺独自の「西本願寺蒐覧会(しゅうらんかい)」を開催。多くの法宝物が披露され、多い時は拝観者が30万人を超えた。

今回の展覧会はその名も『博覧』。「京都博覧会」「西本願寺蒐覧会」で披露された法宝物をはじめ、仏教を児童に伝えるために、現在の円山公園(京都市東山区)南側に開設された「仏教児童博物館」、京都で先駆的な自然史系博物館で、後の研究に功績を残した「平瀬貝類博物館」も取り上げる。

「本展覧会は私が長年企画を温め、展示資料を調べ集めたものです」と和田秀寿学芸員。法宝物や調査で発見された資料の披露だけではなく、当時の主催者が博覧会や展示資料に込めた思い、見せ方の工夫にも迫った。その一つが、博覧会や博物館の古写真を大きな幕にして会場に展示。明治の頃の西本願寺や京都の街並み、観覧者の様子が映し出され、まさに当時の博覧会や博物館を訪れているよう。書院での展示の写真では、既存の障壁画や建材物の損傷に注意を払い、専用展示壁を造作。竹製の柱・柵で観覧者との距離、経路を確保するなど西本願寺の法宝物に対する思いがうかがえる。

「日米親善の人形や鉱石、貝類標本など、通常の展示会にはない資料も多数ご覧いただけます。当時の京都を知る、知りたい方にも来館してもらいたい」と和田学芸員。収集家の間では「物が物を呼ぶ」と言われるそうで、これを機に新たな資料の発見も期待しているそうだ。

和田 秀寿 龍谷ミュージアム学芸員
(西本願寺北小路門前にて)

龍谷ミュージアム
Webサイト

西本願寺蒐覧会会場写真 明治43年『追遠帖』龍谷大学図書館

07 Connect, Unlimited 龍谷大学をつなぐ対談

キーウ大学 交換留学生
ロクソラーナ・オレクシューク さん × グローバルサポーター代表（文学部４年生）**山田 優菜** さん

なにげない一瞬一瞬の幸せを大切に

龍谷大学は創立400周年を迎える2039年を見据えた長期計画（基本構想400）において仏教SDGsを掲げ、誰一人取り残さない取り組みを推進している。このことから、ロシアによるウクライナ侵攻で影響を受けている学生を早急かつ積極的に受け入れ、オール龍谷で支援することを開始した。第一段階として、2022年前期に交換留学生として受け入れたのが、本学が学生交換協定を締結しているキーウ大学（キエフ）のロクソラーナ・オレクシュークさん。彼女の今について、留学生などを支援する学生団体「グローバルサポーター（通称グロサポ）」の山田優菜さんと語り合った。

山田：初めて会ったのは、2021年私たちグロサポが開催したオンラインイベントでしたね。それから来日された時の歓迎会でご挨拶させていただいたり、一緒に食事したり、取材撮影で一緒になったり、会うのは4～5回目ぐらいかな。これからもっと交流を深めていきたいなと思っています。

ロクソラーナ：1年前の留学予定が新型コロナウイルスの流行で延期になり、龍谷大学とはオンラインで交流していました。幼い頃の隣人が日本人だったことから日本に興味を持ち、ウクライナで日本語を学び始めました。より日本語に満ちた環境で勉強したいと思っていたところ、在学していたキーウ大学での選択授業の先輩で京都に行った人がいて、日本への留学に興味がわきました。龍谷大学は京都にあるし、Webサイトで様子を見てみると、キャンパスがとてもきれいだった。そして私の一番好きな赤色がブランドカラーでもあったし、ここに行きたいって。

山田：2月に起こったロシアによるウクライナへの軍事侵攻に驚きつつも、グロサポとしてできることって何だろうと考えました。まず龍谷大学が3月に始めた「ウクライナ人道支援募金」への協力。これをより学生が協力しやすい形にするために食堂にウクライナをテーマにしたメニューを導入し、その売上の一部が支援募金となる仕組みを提案して、大学に採用実行していただきました。ロクソラーナさんの受け入れの話は、大学側も進めておられましたが、グロサポとしても提案させていただきました。ウクライナについては、当時はロクソラーナさんがいる国、としか認識がなかったので、こちらにいらっしゃるまでの間に勉強しました。

ロクソラーナ：日本に留学で来ることになったタイミングは最初に自分が「学びに行きたい」と思っていた頃とはいろんな状況が違い、複雑な心境ですが、学生生活は本当に楽しいです。

ロクソラーナ・オレクシューク
ウクライナ、テルノピリ出身。キーウ大学（キエフ）4年生。日本語専攻。2021年龍谷大学への留学が決まっていたもののコロナ禍で中止となり、オンラインで本学の授業を受ける。その後ロシアによるウクライナ侵攻を受けポーランドに逃れ、ボランティアで避難民の子どもたちを支援。2022年5月に本学のウクライナ学生支援の第一段階の受け入れ学生として来日。

山田 優菜
文学部歴史学科東洋史学専攻4年生。国際交流イベントの推進や留学志望の学生を支援する学生団体「グローバルサポーター」に所属し代表を務める。ウクライナのために学生ができることをと、ロクソラーナさんの受け入れや食堂での募金応援メニューなどを提案した。来日時の学生代表挨拶を担当し、これからも生活面のサポートなどをおこなう。

学生寮で生活しているので、日本文化はもちろん、他の国の文化も感じられる環境ですし、勉強になりますね。日本の景色も思想も人も、母国と全く違っていて興味深い。ウクライナ人と日本人は調和を大事にするところが似ています。自分のことよりもグループの方を優先したり。いつも日本について勉強していましたが、実際にその国に行く体験って大事ですね。

山田：私も高校時代に3週間シドニーに留学した経験があるので、その感覚はよくわかります。机の上だけで勉強するのとは全然違いますよね。興味が深まり、今は私は語学だけでなく歴史からも世界を見てみたいと東洋史学を専攻しています。ロクソラーナさんは俳句がお好きで、この夏は俳句についての集中講義も受講するそうですね。

ロクソラーナ：俳句の翻訳が、ウクライナにいた時から好きだったんです。Web辞典で言葉を調べて、どんな意味かを読み取っていく。例えば、近代の俳人、中塚一碧楼の句に取り組んだことがあります。英語やウクライナ語に訳すと、完全に原文の意味を含ませるのは難しく、意味が変わってしまったり。日本語そのままの味わい深さにも気づかされます。まだ先が見えない状況ですが、今後はウクライナで大学院に進学して、ウクライナにある日本の会社で翻訳の仕事をしてみたい。二つの国を繋げる役割が担えたらと思っています。

山田：大宮学舎から近い京都水族館に最近行かれたんですよね。京都タワーにはのぼりましたか？四条とか、三条とかは行きますか？

ロクソラーナ：京都タワーには、まだ。高いところが苦手で。四条、三条も友達と遊びに行ったり。祇園祭宵山も見に行く予定です。あと、伏見稲荷神社も夏に涼しく感じるのでよく行きますね。いろんな観光地をめぐったりして楽しんでいますよ。寮では、毎晩のように友達とご飯を作ったり、おしゃべりしたり。龍谷大学のベースになっている仏教についてはさほど知識がなかったのですが、友達が仏教の授業を受けたら教えてくれます。寮の留学生たちは夏休みの間みんな国に戻るので、帰れないのは自分だけになりちょっとの期間寂しくなりますが、またこれからウクライナからの留学生も来るようなので、それは楽しみにしています。

山田：世界の出来事に触れて、日本人学生が何かしたいと思っても、日々の暮らしのなかで、実際には何からしたらいいのかわからない、と気持ちが止まってしまうことが多いのですが、私たちグロサポは少しでもその気持ちを未来に繋げていきたいと思いました。今回、学生が参加しやすい形での支援プランを大学側にいくつか提案し賛同していただき、ボランティア・NPO活動センターをはじめとする学内他団体の協力を得て、学生にもウクライナ支援の輪を広げることができました。大学という信頼できる組織が身近で先に動いてくれていたことも、ありがたいですね。私は、今グロサポで取り組んでいるようなことを将来も続けていきたいなと。国内外を問わず学生たちのサポートをしていきたいと思っているんです。学生時代は短いですが人生に大きく影響する大切な時期。その成長を見守ることにやりがいを感じています。

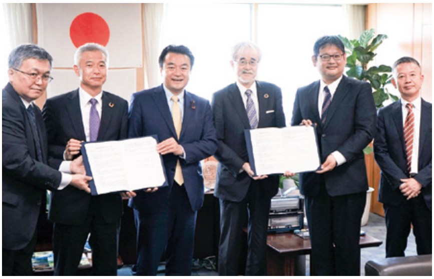
ロクソラーナ：山田さんたちの活動や大学の動きに本当に心が温まります。学生たちも職員さんも先生たちも、いつも「どうですか」「元気ですか」って声をかけてくれて、たくさんサポートしてくださっています。みんな本当に優しくて、思いやってくださる。おかげで、問題なく、安心して暮らしています。友達と毎晩おしゃべりして笑って。small moments。一瞬一瞬の小さな幸せが一番大切だと噛み締めています。

本学のウクライナ人道支援について
https://www.ryukoku.ac.jp/ukraine/

08 News & Topics

最新情報

※マスクを外して写っている写真は
撮影時のみマスクを外しています



「地域脱炭素の推進に関する協力協定」を締結 持続可能な社会の実現に向けた 人材育成を加速

龍谷大学は2022年1月「龍谷大学カーボンニュートラル宣言」を発出し、2039年(遅くとも2050年)までに学内の二酸化炭素排出を実質ゼロとするカーボンニュートラルを実現する「ゼロカーボンユニバーシティ」をめざしており、2022年4月に環境省と「地域脱炭素の推進に関する協力協定」を締結。地域脱炭素社会や地域循環共生圏の実現を担う「グリーン人材」の育成や、環境省の支援のもと滋賀県および大津市と協働し先駆的な連携体の構築に取り組む。

ウクライナの学生を受け入れ学修の機会提供 留学生の歓迎セレモニーを開催

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が続くなか、龍谷大学はウクライナの学生を積極的に支援することを表明。2022年5月には1人目の留学生ロクソラーナ・オレクシュークさんが本学に到着し、歓迎セレモニーを開催した。2022年度第2学期には「日本・ウクライナ大学パスウェイズ」の枠組みを通じて10名を上限としてウクライナからの学生を受け入れることを決定。今後も京都市を含めた学内外の機関と連携しながら継続的支援をおこなっていく。

創造的活動と“ものづくり”のための新施設 最新機材が揃う『STEAMコモンズ』開設

“ものづくり”を通して学部の垣根を超えた学生同士が学び合え、地域と連携・協働する場として『STEAMコモンズ』を2022年4月、瀬田キャンパスに開設。3Dプリンターなど最新の工作・計測機器を備えたFabエリアと、キッチンを備えたGlobal Lounge & Kitchenエリアで構成。開放的で交流しやすい空間が特色。

https://steam.ryukoku.ac.jp/

コロナ禍でがんばる学生を保護者会が応援「百縁夕食」を開催

1食100円で栄養バランスのとれた夕食を提供し、2021年度に好評を得た「百縁夕食」を2022年7月の約1カ月間再度実施。龍谷大学、親和会（保護者会）、龍谷大学生協、Café Ryukoku & が連携し、コロナ禍で支援の必要な学生たちを応援。食事とともに百（多く）のご縁（繋がり）が広がっていくようにという学生への想いを込めた取り組みは、深草・大宮・瀬田の3つのキャンパスで密を避けるため事前予約制で開催し盛況を博した。

ボクシング世界チャンピオン谷口将隆選手初めての防衛戦に勝利

2022年4月、ボクシングWBO世界ミニマム級王者の谷口将隆選手（2016年文学部卒ボクシング部元主将）の初防衛戦がおこなわれ、11ラウンドTKOで勝利を収め見事初防衛に成功した。試合後のインタビューでは、減量に失敗した相手選手を気遣う谷口選手のコメントに会場から拍手が湧きおこった。成就館で開催したパブリックビューイングでは、入澤学長や赤松校友会長をはじめ多くの学生・教職員が熱いエールを送った。

先端理工学部生の主体的な活動を促す期間「R-Gap：Ryukoku Gap quarter」が始動

2020年度に改組したカリキュラムの目玉とも言える「R-Gap」が2022年6月に始動。「R-Gap」期間である3年次の6月中旬～9月上旬は、必修科目を配置せず、授業以外の活動（調査・研究、海外留学、インターンシップ、ボランティア等）を学生自ら自由に設計可能。学部独自プログラムも選択でき、様々な課題に自ら取り組み主体性・多様性・協働性を培う。

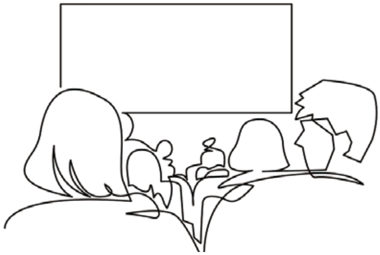
https://www.rikou.ryukoku.ac.jp/rgap/

『政策学部・政策学研究科 10周年記念誌』を作成

政策学部・政策学研究科は2011年に創設され、2020年に創設10周年を迎えた。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、当初の予定から1年遅れで記念式典・シンポジウムを開催。10年間の歩みを記念誌と記念サイトに収蔵。

10周年記念誌（デジタルブック）
https://www.policy.ryukoku.ac.jp/10th/dbook/book.html

政策学部・政策学研究科創設10周年記念サイト
https://www.policy.ryukoku.ac.jp/10th/



映画上映とミニレクチャーで楽しく学ぶ RYUKOKU CINEMA（龍谷シネマ）を開催

龍谷大学ユヌスソーシャルビジネスリサーチセンターは、映画鑑賞と教員によるミニレクチャーで社会的なテーマを楽しく学べる「RYUKOKU CINEMA（龍谷シネマ）」を2022年6〜7月に成就館とオンラインで開催。2022年度は一般の方も無料で参加可能とし、一人で映画を観るだけでは得られない視点や考え方に触れる好機となった。また会場では龍谷大学生が運営する「café rita（カフェリタ）」からフェアトレードコーヒーが無料提供された。

知的好奇心をくすぐる学問のトビラ 研究広報Webサイト『Academic Doors』を開設

9学部、1短期大学部、10研究科を擁する龍谷大学の多種多様な分野に精通した研究者との対話を通じて研究内容を紹介する研究広報Webサイト『Academic Doors（対話で開く、研究の世界）』を2022年3月に開設。インタビュー形式で先生ご自身の言葉で語られる研究の話は、新たな視点や考え方、未知なる分野の知識を知る喜びにあふれている。

https://academic-doors-ryukoku.jp/

農学部×経営学部『HANNA瀬田』 瀬田キャンパスをイメージした紅茶を開発

農学部と経営学部が取り組む文理融合型キャンパス横断学修プログラム事業の一環として、両学部生が共同で調査分析、コンセプト開発、ネーミング等に取り組み企画開発したオリジナルブレンド紅茶『HANNA瀬田』を2022年7月に発売。高級紅茶店ムレスナティーハウスの協力のもと、瀬田キャンパスのイメージを香りで追求して、多様なフレーバー紅茶の試飲を繰り返し完成させた。深草キャンパス内Café Ryukoku &、大垣書店京都店などで購入可能。

課外活動（クラブ活動）情報を スマホで見られる 「龍谷課外活動公式アプリ」が登場

龍谷大学はこれまで課外活動の情報を発信してきたスポーツ特設Webサイト「Ryukoku Sports+」を閉鎖し、新たに2022年5月からスマートフォン用の「龍谷課外活動公式アプリ」を配信。各サークルやクラブのイベントやコンサート、試合情報の発信のほか、体育局クラブのブログなど、情報を集約した媒体として大学内外へ発信。

https://yappli.plus/ryusupo-app_brandcenter

男子バスケットボール部 創部初の西日本ベスト8進出

2022年6月、コロナ禍で中止になっていた「西日本学生バスケットボール選手権大会」が3年振りに開催され、男子バスケットボール部が見事ベスト8まで進出する快進撃を見せた。2回戦で優勝候補の東海大学九州との接戦を制すると、続く関西大学にも勝利し、ベスト8へと駒を進めた。ベスト4を懸けて挑んだ名古屋学院大学との対戦では87対65で惜しくも敗退となったが、西日本王座決定戦となる頂上決戦でのベスト8は創部初の快挙となった。

バドミントン部が春季リーグ戦でアベック優勝 女子は20季連続優勝を達成

「2022年度関西学生バドミントン連盟春季リーグ戦」(2022年4～5月)において、バドミントン部は男子、女子ともにリーグ1部で優勝し、男女アベック優勝を果たした。男子は8季連続優勝、女子は怒涛の20季連続優勝となった。また、大会MVPにあたる「バドミントンマガジン賞」に西 大輝さん(政策学部2年)が選出された。その後「関西学生バドミントン選手権(個人戦)」(5～6月)では、男女ともにシングルスで優勝・準優勝を勝ち取るなど多数入賞した。

柔道部(女子)が準優勝の活躍「2022年度全日本学生柔道優勝大会」

団体戦で「学生柔道日本一」の座を争う大学柔道対抗団体戦「全日本学生柔道優勝大会」が2022年6月、日本武道館で開催され、柔道部(女子)が準優勝に輝いた。トーナメントで争う女子5人制(先鋒・次鋒は57kg以下、中堅・副将は70kg以下、大将は無差別)で、王者の東海大学を相手に最後まで気持ちのこもった巧みな試合運びで競り合い、最後は指導3つで敗戦。悲願の優勝に一歩届かなかったものの2018年の優勝以来の快挙となった。

副学長に深尾昌峰(ふかお まさたか)教授が就任 (任期 2022.4.1～2024.3.31)

1974年生まれ。滋賀大学大学院修士課程修了。教育学修士。2010年から本学法学部で准教授として教鞭を執る。2011年本学政策学部准教授を経て、2018年4月から同学部教授として現在に至る。「きょうとNPOセンター」「公益財団法人京都地域創造基金」などの設立・運営に携わり、地域社会の活性化や非営利組織の持続可能なあり方をテーマに活動をおこなう。専門は非営利組織論、ローカルファイナンス。

09 Book Café 新刊紹介

＊大学から出版助成を受けた新刊情報

龍谷大学仏教文化研究叢書42
『日本と東南アジアの仏教交流＊
ーその史実と展望ー』
林 行夫（文学部教授）編著
三人社／6,160円（税込）

龍谷大学仏教文化研究叢書43
『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究＊
ー「別要」教理篇・上ー』
楠 淳證（文学部教授）・
後藤 康夫（世界仏教文化研究センター嘱託研究員）編
法藏館／22,000円（税込）

龍谷大学国際社会文化研究所叢書 第29巻
『フェリックス・ガタリと現代世界』＊
村澤 真保呂（社会学部教授）・
杉村 昌昭（龍谷大学名誉教授）・
増田 靖彦（経営学部教授）・
清家 竜介（社会学部准教授）共編著
ナカニシヤ出版／3,960円（税込）

龍谷大学国際社会文化研究所叢書 第30巻
『越境者との共存にむけて』＊
村田 和代（政策学部教授）編
大石 尚子（政策学部准教授）・
ジュリアン・チャプル（国際学部教授）著
ひつじ書房／4,620円（税込）

龍谷大学国際社会文化研究所叢書 第31巻
『網島梁川の宗教哲学と実践』＊
古荘 匡義（社会学部准教授）著
法藏館／1,980円（税込）

龍谷大学国際社会文化研究所叢書 第32巻
『E・H・カーを読む』＊
清水 耕介（国際学部教授）編
ナカニシヤ出版／3,080円（税込）

『末弘厳太郎の法学理論＊
ー形成・展開・展望ー』
川角 由和（法学部教授）著
日本評論社／9,680円（税込）

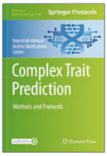
『母と娘の物語＊
ー戦後オーストリア女性文学の《探求》ー』
國重 裕（経営学部教授）著
松籟社／2,640円（税込）

『大麻使用は犯罪か？
ー大麻政策とダイバーシティー』
石塚 伸一（法学部教授）・
加藤 武士（ATA-net研究センター嘱託研究員）編著
現代人文社／2,750円（税込）

『会社法の制度と機能』
今川 嘉文（法学部教授）著
中央経済社／3,080円（税込）

『フォーカシング指向心理療法の基礎
ーカウンセリングの場におけるフェルトセンスの活用ー』
内田 利広（文学部教授）著
創元社／2,860円（税込）

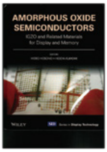
『基礎から学ぶ推薦システム
ー情報技術で嗜好を予測するー』
奥 健太（先端理工学部講師）著
コロナ社／4,950円（税込）



『Complex Trait Prediction
ーMethods and Protocolsー』
小野木 章雄（農学部准教授）共著
Springer／26,311円（税込）（電子版）
32,889円（税込）（印刷版）

『非営利用語辞典』

公益社団法人　非営利法人研究学会編
川中　大輔（社会学部准教授）・
松浦　さと子（政策学部教授）著
全国公益法人協会／3,900円（税込）



『Amorphous Oxide Semiconductors
—IGZO and Related Materials for Display and Memory—』

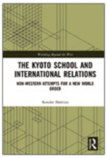
木村　睦（先端理工学部教授）共著
Wiley／$124（電子版）
$155（印刷版）

『質的調査の方法
—都市・文化・メディアの感じ方—』（韓国語版）

工藤　保則（社会学部教授）共編著
The Good Sound／₩18,000

『壁が崩れた後
—文学で読むドイツ統一後の東ドイツ社会—』

國重　裕（経営学部教授）著
郁文堂／1,650円（税込）



『The Kyoto School and International Relations
—Non-Western Attempts for a New World Order—』

清水　耕介（国際学部教授）著
Routledge／€120（印刷版）
€33.29（電子版）

『昭和天皇拝謁記（1〜5巻）
—初代宮内庁長官田島道治の記録—』

瀬畑　源（法学部准教授）編
岩波書店／各3,300円（税込）
6巻・7巻　2022年10月以降刊行予定

『憲法とそれぞれの人権［第4版］』

寺川　史朗（法学部教授）・
濵口　晶子（法学部准教授）共著
法律文化社／2,860円（税込）

『ダーク・エミュー アボリジナル・オーストラリアの「真実」
—先住民の土地管理と農耕の誕生—』

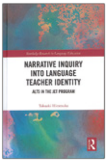
友永　雄吾（国際学部准教授）翻訳
明石書店／3,080円（税込）

『つまずきから授業を変える！
高校地理「PDCA」授業＆評価プラン』

中本　和彦（法学部准教授）共編著
明治図書出版／2,420円（税込）

『新しい　家族の教科書
—スピリチュアル家族システム査定法—』

東　豊（文学部教授）著
遠見書房／1,870円（税込）

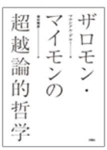


『Narrative Inquiry into Language Teacher Identity
—ALTs in the JET Program—』

平塚　貴晶（国際学部准教授）著
Routledge／€130（印刷版）
€33.29（電子版）

『Come imporre un limite assoluto al capitalismo?
—Filosofia politica di Deleuze e Guattari—』

廣瀬　純（経営学部教授）著
ombre corte／€12



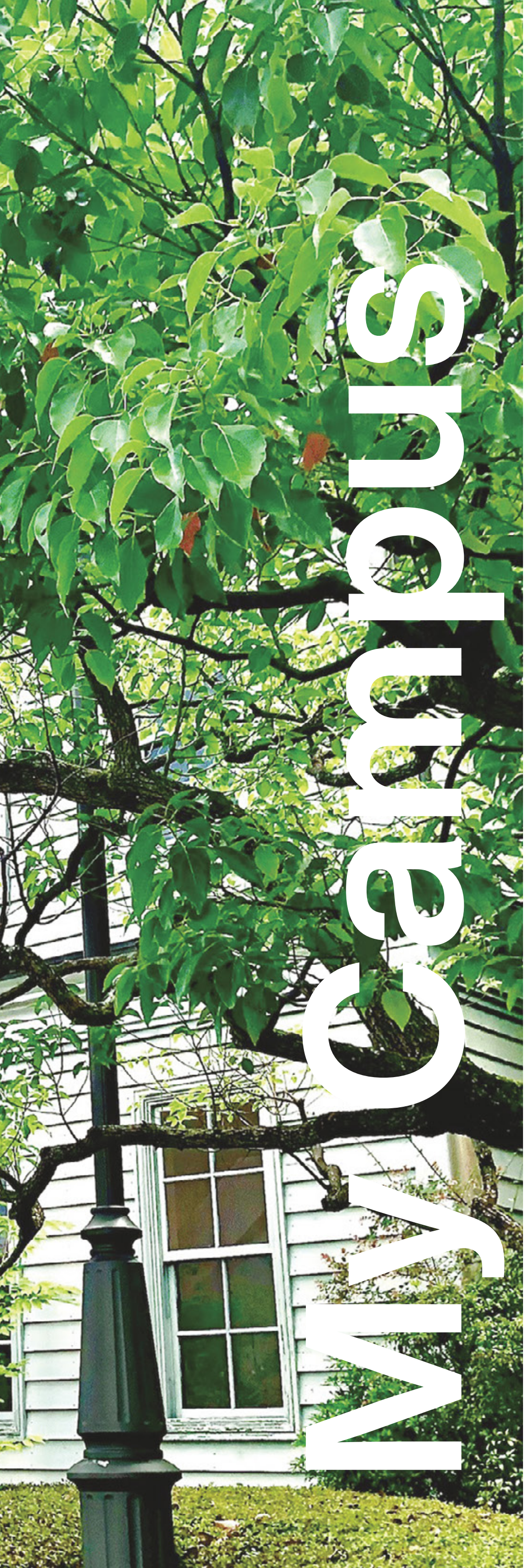
『ザロモン・マイモンの超越論的哲学』

増田　靖彦（経営学部教授）翻訳
月曜社／4,400円（税込）

『ひとりではじめる植物バイオテクノロジー入門
—組織培養からゲノム編集まで—』

三柴　啓一郎（農学部教授）編著
国際文献社／4,400円（税込）

学長法話
命を支える食



10 My Campus
マイキャンパス

タイトル「緑樹とグリーンハウス(樹心館)」
Kさん　2022年6月撮影(瀬田キャンパス)

「My Campus」ページでは、時代の流れとともに変わりゆく龍谷大学の「今」を感じていただけるキャンパス風景写真を、読者の皆さまから募り紹介しています。キャンパスの素敵な瞬間を是非写真に収めてご応募ください。
応募写真の中から厳選の上、次号の本ページを飾らせていただきます。

応募締切
2023年1月6日(金)

募集内容
龍谷大学のキャンパスを撮影した写真
(本学と関連のある場所・施設等)

応募方法
以下のフォームからご応募ください。
https://www.ryukoku.ac.jp/about/mycampus/

注意事項
- 2022年9月以降に本人が撮影した写真に限ります。
- 1点につき10MB以内のjpgファイル。
- 誌面の都合上、掲載は横サイズのトリミングとなります。撮影の際にはご留意ください。
- 組写真、合成写真、過度の画像補正など実像に反する写真は不可。
- 著作権・肖像権の侵害には十分に注意してください。
- 応募に係る個人情報は本事業以外には利用しません。
- 応募写真につきましては、龍谷大学が広報活動のために自由に利用できる権利を許諾していただきます。

応募写真は以下から閲覧していただけます。
龍谷大学の「今」を是非ご覧ください。
https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/mycampus/

Ryukoku Magazine

2022 VOLUME 94

広報誌「龍谷」

ウクライナへの人道支援募金

本学では2022年3月11日から龍谷大学と学友会、校友会、親和会が一体となり、ウクライナへの人道支援やキーウ大学への支援を目的に募金活動を開始しています。募金使途は「ウクライナへの人道支援」「キーウ大学（学生交換協定校）への支援」「本学が受け入れたウクライナ人大学生への支援」です。寄付金の送金は、キーウ大学へ直接送金するとともに、人道支援分については、ウクライナ大使館、UNICEF（国連児童基金）、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）等を通じて届ける予定です。
https://www.ryukoku.ac.jp/donation/index.html

その他の龍谷大学への支援（寄付）については下記URLまたはQRコードからご覧ください。
ご支援・ご協力の程よろしくお願いいたします。
https://www.ryukoku.ac.jp/contribution/index.php

『龍谷の味』全国のローソン（ウィンターギフト）で新発売（10月初旬受付開始）

農学部実習農場（滋賀県大津市）で収穫した「龍谷米」5品種とオリジナル白味噌（1袋）がセットになった「龍谷の味」をローソンのウィンターギフトで販売いたします。
「環境こだわり」栽培で農学部生たちが育てた龍谷米、その米と大豆を使用して、京都の老舗（株）石野味噌で醸造した白味噌です。全国のローソン店舗または、Webからご注文いただけます。次代を担う農学部生たちの「食への思い入れ」もよい味を加えています。是非、ご賞味ください（受付期間：2022年12月1日（木）迄　お届け期間：12月下旬）。

ローソンギフト・予約商品サイト　http://lawson-gift.jp/CGI/index.cgi

料理レシピ　https://ryukoku-nojomiso.com/

広報誌「龍谷」94号読者アンケート&プレゼントのご案内

今後の広報誌づくりのため、皆さまのご意見をお聞かせください。アンケートにご協力いただいた方の中から抽選でご希望の読者プレゼントが当たります。
お寄せいただいた感想・近況は「読者のひろば」に掲載させていただくことがあります。
当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。

締切　2023年1月6日（金）
Web応募フォーム　https//www.ryukoku.ac.jp/enquete/

読者プレゼント

龍谷ミュージアム
オリジナルエコバッグ＆付箋セット … 5名様

経営学部藤岡ゼミ×（株）マンドリル
レトルトカレー「ぶどう山椒をかけて食べるカレー」… 5名様
※3種類の中からいずれか1種類をお届け。

ハガキでご応募の方は、ご希望のプレゼント名を明記した上で、住所・氏名・年齢・職業・電話番号・（龍谷大学卒業生は卒業年度・学部）および広報誌「龍谷」の感想・意見、近況などを書き添えてご応募ください。

※いただいた個人情報は広報誌「龍谷」の編集以外の目的には使用いたしません。

読者アンケートのあて先
龍谷大学 学長室（広報）
〒612-8577　京都市伏見区深草塚本町67
電話 075（645）7882　FAX 075（645）8692
E-mail：kouhou@ad.ryukoku.ac.jp

読者のひろば

龍谷大学はどんどん発展を遂げて、本当にUnlimitedな大学で、卒業生として誇りを持つことができます。
（卒業生 S さん）

学びの意欲が湧いてきます。現在 57 歳、今年 4 月から通信制の大学に入学しました。
（在学生保護者 K さん）

広報誌「龍谷」のデジタル版配信について

広報誌「龍谷」はデジタル版でも閲覧していただけます。冊子版の送付を希望されない方は、下記URLまたはQRコードからメールマガジン登録をお申し込みください。ご登録いただいたメールアドレスにデジタル版発行のご案内をお届けします。

広報誌「龍谷」デジタル版配信（メールマガジン登録）
https://www.ryukoku.ac.jp/prdigital/

広報誌「龍谷」デジタルライブラリー
（過去の広報誌もご覧いただけます）
https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/

編集委員：井上 辰樹、木村 睦、野呂 靖
事務局：田中 雅子、谷 穂乃美

広報誌「龍谷」94号
2022年9月16日発行
編集：広報誌「龍谷」編集委員会
制作：龍谷大学 学長室（広報）
発行：龍谷大学

〒612-8577　京都市伏見区深草塚本町67
電話　075（642）1111（代表）
龍谷大学ホームページURL
https://www.ryukoku.ac.jp/

公式 Twitter「龍谷大学広報」
twitter.com/ryukoku_univ_pr

公式 Instagram「龍谷大学」
www.instagram.com/ryukokuuniversity

公式 Facebook「龍谷大学」
www.facebook.com/RyukokuUniversity/

公式 YouTube「龍谷大学」
www.youtube.com/user/RyukokuUniversity

RYUKOKU UNIVERSITY